



高村夏輝
ラッセルの哲学
[1903-1918]

センスデータ論の
破壊と
再生

Natsuki Takamura
Philosophy of Russell
[1903-1918]

Return of
the Sense-Datum
Theory

keiso shobo

見ることは触れることとほとんど違わない。私たちは、子どものやわらかな頬を見て、薔薇色の頬に触れる。見るとは視線で物に触れることであり、私と物との間に意識あるいは気づくという関係が成立することに他ならない。これは、本書を通して私が守り抜こうとする直観であるが、さまざまな問題を抱えてもいる。手あかのついた例で申し訳ないが、たとえばいま私には目の前のコーヒーカップのふちが楕円を描いているように見える。しかし真上から見ればそれは円に見えるだろう。もし斜めからであろうと真上からであろうと、コーヒーカップを見るのが私とそのカップとの間の関係なのだとしたら、同じカップの同じふちが円いと同時に楕円だということになる。しかし、そんなことはありえないのではないだろうか。こんな風に問題を立てると、多くの哲学者たちは笑うか、あるいは困惑するかもしれない。そして私の直観がそれほど自明ではないとか、「見る」という言い回しについてまことしやかな分析を披露し、問題を解消してくれるかもしれない。実際、そういう経験をしばしばした。けれどもそうした言葉に納得したことはない。

本書は、この問題をどこまでも真剣に受け止め、そして「見ることは触れることだ」という直観を手放すことなく解決しようという私なりの試みである。私の解答は本書の第8章で提示するが、センスデータ論の一種である。こんな風に言うと、やはり多くの哲学者たちは笑うか、あるいは困惑するかもしれない。いまさらそんな古臭い考えを持ちだしてくるなんてとか、センスデータを認めたら、コーヒーカップそのものではなくセンスデータに触れることになるのではないかとされるだろう。こんな風に言ってくる人の間違いは、「自分はセンスデータ論を理解している」と考えている点にある。確かに、現在の分析哲学界の常識からすればそう思われても仕方がないのだが、ここはひとつそうした常識を疑ってみたい。いただきたい。

本書で、私はバートランド・ラッセルの著作に立ち返り、センスデータ論が何を目的に、どのように形成されたかを追跡することで、常識的なセンスデータ論に対するイメージを徹底的に破壊したい。そして同時期にラッセルが取り

上げていた様々なアイデアを使うことで、もっと説得力があり実り豊かな理論としてセンスデータ論を生き返らせたいと思う。だが、ラッセルのアイデアがどのようなものであるのか、どのような使い方をすべきかについて、やはり分析哲学的常識と私の理解はかなりの違いがある。そこで本書では、かなりの部分をラッセル解釈に費やすことになった。

『ラッセルの哲学』というタイトルや目次の表題を読まれた方は、本書はラッセル哲学の研究書だと思われるだろう。もちろんそれは間違いではない。だがそれが、本書の目的はラッセルが何を考えたかを明らかにすることであり、高村自身の思索は展開されていないという意味であれば、否定したい。あまりラッセルをわるく書きたくないのだが、彼は実にしばしば自分にしか分からない書き方で書く。そしてとくにセンスデータ論に関しては、彼の叙述はデッサンの段階で終わっている。そこで意味不明な箇所を解釈し、細部を詰めるために、かなりこちらからアイデアを持ちださなければならなかった。もっとも、そうした局面で自分で考えるときも、しょっちゅうラッセルには「降りて」きてもらっていたから、どこまで自分のオリジナルと言えるかは分からない。ただ、本書でのラッセルと私の関係は、ロゼッタストーン of の制作者とシャンポリオンのようにではなく、言いすぎかもしれないが、『プリンキピア』におけるホワイトヘッドとラッセルのようなものとして考えていただけるとありがたい。

本書は長く、細かい論点にこだわる場面も多いので、まずは全体のおおよそ目的と見取り図を提示しておきたい。

パートランド・ラッセルの哲学、特に1912年から18年にかけて彼が展開していたセンスデータ論は、イギリス哲学の伝統である、経験主義的基礎づけ主義という認識論的立場に立つものと解釈されてきた。すなわち、外界の知識に対する懐疑論（デカルトによる悪霊の懐疑や錯覚論法）への取り組みから探究を始め、主観的な感覚内容であるセンスデータに関する知識を懐疑に抗しうる不可謬な認識論的所与とし、それに訴えることにより物体の知覚や経験科学の知識などを正当化しようとする立場である。ラッセルのセンスデータ論は、こうした伝統的な経験主義的基礎づけ主義という哲学的プログラムを、自身がその創始者のひとりとなった記号論理学を用いて現代化したものであると解釈されてきた。このように解釈されたラッセルのセンスデータ論は、科学的知識に強固な基礎を与えつつ、空疎な形而上学的思弁を排するものとして論理実証主義者たちに

受容され、20世紀前半に哲学の新しい時代を作る元となった。しかしさまざまな強力な批判を受け、経験主義的基礎づけ主義が哲学的プログラムとしての評価を著しく落としたのに伴い、ラッセルのセンスデータ論も支持を失い、現在では知覚の理論や形而上学に関する有効な哲学的選択肢であるとは思われていない。哲学史の重要な一ページとして認識されてはいるものの、すでにその命運が尽きた理論として扱われている。

そこで本書では、ラッセルのセンスデータ論を生きた哲学的選択肢として評価するために、解釈の際に前提される枠組みを変更し、その枠組みの中にラッセルのさまざまな主張や議論を位置づけ、適切に理解し直し、一貫性のある体系として提示することを試みる。そしてラッセル自身が論じていない部分を自前の議論で埋め、さらに一步前進するために新たな概念や見解を導入し、センスデータ論を一つの世界像として完成させる。

解釈の枠組みの変更とは、従来の解釈による経験主義的基礎づけ主義から齊合說的認識論への変更である。従来の解釈は、ラッセルは懐疑論としての外界問題に取り組んでいるのだとする。そして、センスデータの面識による知識を不可謬な知識とし、記述理論をそうした知識への意味論的・認識論的還元の手段とするという仕方で、基礎づけ主義という枠組みの中にラッセルの見解を位置づけている。これに対し、本書では、ラッセル自身が哲学的方法論として提示している「分析の方法」が齊合說的立場であることを示し、外界問題が経験や信念の齊合性の問題であるとして、その解答としてセンスデータ論を理解する。そしてこの立場から展開される哲学的考察の中に、論理的原子論の形而上学や記述理論、論理的固有名などの議論を位置づけ、それらが果たすべき役割を明らかにする。解釈の枠組みをこのように変更することによって、これまでセンスデータ論に対して提出されてきたさまざまな批判に答え、センスデータ論をより説得力のある立場とすることができる。

第I部は、ラッセルが外界問題に取り組む際の論理的装置や、解決となる世界像が則るべき一般的な存在論を提示することを目的とする。まず、第1、2章で1903年の『数学の諸原理』から1910年の『プリンキピア・マテマティカ』を経て1918年の「論理的原子論の哲学」に至る、論理的原子論の形而上学や記述理論などの不完全記号の学説の成立過程を追いながら、その立場にとって根本的なテーゼや、それが果たすべき理論的役割について論じる。ラッセル哲学の出発点である『数学の諸原理』では、我々による認識から独立に世界が實在

し論理学はその一般的構造を研究するとして「实在論的論理観」^②、その实在に対する知識は表象や観念などの媒介を必要としないとする「直接知覚説」、すべての存在者が単一の変項の値となることにより、論理があらゆる存在者を一括して対象とするとして「論理の普遍性」という、ラッセルにとって根本的な三つのテーゼが鮮明に打ち出されている。「数学の諸原理」では、これらのテーゼに基づく、原子論的な形而上学が提示されている。

しかしこれら三つのテーゼは、偽の命題の存在に関する問題、「表示について」における「グレイの悲歌」論証によって提示される表示概念の問題、そしてクラスや命題関数に関する「ラッセルのパラドクス」など、その論理体系の根本概念に関わる重大な困難を惹き起こすものでもあった。以上の困難を、三つのテーゼを可能なかぎり保持しつつ解決するためにラッセルが考案したのが、「不完全記号の学説」である。まず、記述理論によって、記述句が意味すると考えられていた表示概念を不要のものとした。次に、構成主義的性格を持つタイプ理論と無クラス理論が、命題関数とクラスに関するパラドクスの発生を防止する。そして多項関係理論により、命題と命題関数が判断に基づく構成物とされ、実在性が否定される。その結果、「数学の諸原理」よりも洗練された形而上学が成立した。これが「論理的原子論」と呼ばれる存在論である。

以上のような成立過程の理解を通じて、不完全記号の学説にラッセルが担わせた理論的役割に関する解釈が更新される。従来の解釈では、記述理論やクラスの理論は、問題を惹き起こす対象をセンスデータへと還元し消去する手段として理解される。特に外界の知識の問題との関連では、懐疑の対象となる物理的対象を確実な知識の対象であるセンスデータへと還元するための理論的装置として解釈される。本書では、従来の解釈とは反対に、「記述理論や多項関係理論などの不完全記号の学説を、実在する対象から問題となる対象を適切に構成する手続きを定める理論として理解する。記述理論は、記述されている対象が存在しない文脈、同一性が問題になる文脈、命題態度が問題になる文脈以外では、「記述句を固有名と同等に扱うこと」が可能であるとし、かつその意味である記述内容が固有名によって指示される実在物であると誤解されるという論点を含んでいる。また多項関係理論やタイプ理論を通じて構成される命題や命題関数は、「プリンキピア・マテマティカ」の体系では原始の対象として扱われている。記述内容や命題など構成される対象を、ラッセルは「ないもの nothing」と呼ぶのだが、つまり不完全記号の学説のポイントは「ないもの」の存在を否定

することよりも、むしろ問題が生じないような状況では「ないもの」を存在者として扱えることを保証することにあるのである。そしてその結果、論理的原子論の体系には、「記号・表現からなる秩序」と、「実在する個物や事実からなる秩序」の間に、「判断を通じて構成される「ないもの」の秩序」が挟み込まれるという三層構造を持つことになる。このように解釈することにより、第Ⅱ部での哲学的方法論に関する議論や第Ⅲ部での外界問題の解決の際に、不完全記号の学説が重要な寄与をなすことになる。

ラッセルの不完全記号の学説は未完成であり、「変項」という本来なら「ないもの」とされるべき表示概念を実在する対象として前提してしまっていた。さらに多項関係理論は論理形式という対象を導入することにより、この困難を深刻化している。ラッセル自身このことをはっきりと認め、解決の方向性を概略的に示しているのだが、それを十分に展開することはなかった。本書の第3章では、ラッセルの示唆する方向で変項と論理形式を不要としたうえで「ないもの」の秩序を構成し、また实在の秩序に関しては、ラッセルが認めているさまざまな事実の構造を具体的に与えることによって、「論理的原子論の形而上学」を完成する。第Ⅲ部で我々は外界に関する知識の問題に答え、物的世界のあり方を特定するが、それはこの第Ⅰ部で得られた形而上学的枠組みに即してなされる。

第Ⅱ部では、ラッセルの哲学的方法論に関する従来の理解を改め、適切な解釈を与えることを目指す。まず第4章でラッセルのテキストに即して、その哲学を経験主義的基礎づけ主義とする従来の解釈を徹底的に批判する。基礎づけ主義的解釈は、ラッセルの外界論を「デカルトの懐疑に答える試み」と理解する。センスデータ論は、外界の事物についての疑わしい知識を「センスデータについての不可謬な知識に還元する試み」であり、「哲学入門」の代表象説的で实在論的なセンスデータ論から「外界に関する我々の知識」などでの論理的構成の立場への移行も、基礎づけの徹底として理解される。このように理解されるセンスデータ論に対しては、セラーズの「所与の神話」やウイトゲンシュタインの「私的言語論」など、致命的とも言える強力な認識論的・言語論的批判が出されている。しかし、基礎づけ主義とする解釈は、ラッセル自身のテキストとの齟齬が多い。たとえばラッセルが外界に関して問題とするのは、デカルト的懐疑ではなく、一つの事物が異なる位置からは異なる見え方をするという「相反する現れ」の問題であるし、またラッセルのセンスデータは決して、確実に真であるという意味で不可謬の知識の対象ではない。したがってラッセルのセンス

データ論を基礎づけ主義と解釈することはできず、そうした解釈を前提したラッセル批判も受け入れるわけにはいかない。

第5章では従来の解釈に変え、ラッセル自身が提示している「分析の方法」に従う探究として、ラッセルの哲学を解釈する。「分析の方法」は、我々の信念を全体として受け入れることから出発し、信念総体に内在的に批判を進め、不整合を取り除き、より斉合的なものにする試みである。そして信念の総体から不整合が取り除かれ斉合化されたことをもって、信念は正当化された知識と見なされる。こうした方法論に従うラッセルの哲学、特にその外界論は、1912年の「哲学入門」では基礎づけ主義との折衷的立場であった理論が、1914年の「外界の知識」では一貫した斉合説的理論へと変化していったと理解される。このように哲学的方法論に関する解釈を改めることにより、ラッセルの哲学的分析を、さまざまな経験的知識を前提し利用しながら行われる手続きとして理解できるようになり、基礎づけ主義を前提とするセンスデータ論に対するさまざまな認識論的批判が、ラッセルのセンスデータ論には当てはまらないことが明らかになる。

哲学的方法論として「分析の方法」を採用することは、命題の理解に関する「面識の原理」、および命題の構成に関する「多項関係理論」という、ラッセル哲学にとって根本的な見解と両立可能であるかどうかが問題となる。そこで第6章では、ラッセルの「面識」が実在の対象に対する無意識的な認知的関係でありうること、また多項関係理論が描出する判断形成が、「認識主体自身の合理性の能力」の活用に基づくのではなく、サブパーソナル・レベルに属する信念形成過程であることを示すことにより、面識の原理や多項関係理論と「分析の方法」が両立可能であるとする。主体自身にとって意識的ではなく、自覚的ではない過程によって形成された命題や記述であるからこそ、そこから哲学的な問題が発生し、それを解決するために分析という作業が必要となるのである。さらに、センスデータを要素とする事実の面識である感覚という心的状態から、物体に関する記述を内容とする知覚、そして概念的内容を持つ思考がいかにして形成されるかに関する一つの理論を、認知科学や心の哲学の議論を手がかりとして作り上げる。それにより、センスデータや物体に関する記述内容、そして概念的思考が私秘的ではないとし、私的言語論によるラッセル批判を解消する。そして日常言語を用いたコミュニケーションに関して、ラッセルの見解と整合的な説明を与える。

第Ⅲ部では、「分析の方法」を外界の知識に適用することにより形成される二種類のセンスデータ論を検討し、どちらがより優れているかを決定する。物理的世界に関する常識的な世界像には、異なる視点から同じ物体が異なる見え方をするという「相反する現れ」の問題がある。これは、物体の見え方に関して我々が有している直観的に説得力のある信念や経験内容が不整合であるという、経験的信念の斉合性の問題であるため、「知識の総体から出発し、不整合を取り除き斉合化する」という「分析の方法」によって答えられるべき問題である。そしてこの問題に取り組むことを通じて、ラッセルの二つのセンスデータ論は形成されるのである。

ラッセルが1912年の「哲学入門」で支持したのは、我々は直接的な意識の対象であるセンスデータから物理的对象を推論し、記述的に知るとする立場である。我々はこれを「代表的センスデータ論」と呼び、第7章ではこの立場を検討する。代表的センスデータ論は、物理的对象とその見え方の担い手であるセンスデータを存在者として区別することにより不整合を解消する。しかし、逆に、センスデータと物理的对象との間に認識論的に十分緊密な関係を成立させることができず、それらについての知識間の関係は、矛盾しないという意味で整合的にはなるが、互いに支えあうという意味での斉合性がなくなってしまう。その結果、物理的世界に関する懐疑論が生じてしまう。こうした議論を提起しているのが、「哲学入門」から「外界の知識」の立場への移行期にあたる「物質について」である。このような知覚される世界像と物理的世界像の不斉合性という「世界観の斉合性」の問題が生じるため、代表的センスデータ論は外界の知識の分析としては支持できないと結論せざるをえない。

ラッセルは「外界の知識」などにおいて、代表的センスデータ論に換え、我々が日常的に知覚する物体と原子などの科学の理論的对象を、センスデータから論理的に構成することを試みている。我々はこれを、「構成的センスデータ論」と呼び、第8章で検討する。構成的センスデータ論によれば、世界は六次元の空間と一次元の時間、合わせて七次元の時空枠組みの内部にセンスデータが一定の秩序に従って配列されるというあり方をしている。我々はこの秩序を、法則的知識に基づく記述的知識を通じて把握しているが、実際は異なるセンスデータを同一の対象であると誤認することにより、三次元の日常的空間や物体が存在していると信じてしまう。「相反する現れ」の問題も、この誤った同一性の認識のために生じるのである。構成的センスデータ論は「分析の方法」

に従って考察を進めることにより、この誤った同一性の認識を取り除き、外界に関する信念を齊合化し「相反する現れ」を解決する。そして我々が存在していると信じている物体や三次元の空間を、センスデータやそれが定位される空間領域の系列として論理的に構成してみせる。さらにはセンスデータの、我々の識別能力を超えるほど細分化されたその部分から、物理学の理論的対象を構成することにより、「世界観の齊合性」の問題を解決する。

構成的センスデータ論にとって大きな問題となるのが、生理学などによって記述される、知覚経験の生起に関する因果的説明との整合性である。構成的センスデータ論は、センスデータを外界に位置する物理的対象と見なす点で、直接知覚説というラッセルにとって根本的な哲学的見解に沿った立場である。しかしセンスデータが、身体(脳)状態を原因として惹き起こされる主体の内部の存在だとする知覚の因果説を採るなら、直接知覚説が否定されてしまう可能性がある。ラッセルは構成的センスデータ論と同時期に書かれた「原因の概念について」において因果関係に関する伝統的な理解を排し、出来事間の法則的相関関係に置き換えた。身体状態とセンスデータとの関係を、このような因果関係論によって再解釈することによって、直接知覚説としての構成的センスデータ論から困難を取り除く。

最後に、第6章で提示した、感覚から知覚を経て思考が形成される過程に関する理論や日常言語によるコミュニケーションの理論が、構成的センスデータ論の七次元の世界像においてどのように実現されるかを説明し、我々が物体についていかなる内容の知覚を持ち、どのような内容の概念的思考を形成するかを論じる。我々が物体について形成するのは記述的な内容を持つ一種の信念であるが、不完全記号の学説が説明するように、我々はこれを記述される物体そのものを要素とする単称的内容の経験であると誤解する。そして我々が日常言語を用いて行うのは、論理的に構成されるセンスデータの系列という論理的虚構を實在の対象であるとする、誤った信念を共有することにより成立するコミュニケーション、すなわち「虚構依存的コミュニケーション」であるとする。

ラッセルの哲学 [1903-1918]

センスデータ論の破壊と再生

目次